

琵琶湖における外来魚駆除事業の変遷

山本 充孝

(滋賀県水産試験場)

はじめに

近年、琵琶湖では固有種であるホンモロコがたくさんとれるようになってきたが、それは内湖である伊庭内湖・西の湖、そして琵琶湖南湖においてホンモロコの産卵繁殖が回復しているためである。実は、これらの水域ではホンモロコが増える前にオオクチバス・ブルーギルといった外来魚の精力的な駆除が行われており、ホンモロコの復活は外来魚の生息量の減少が前提として必要だったと考えられる。ニゴロブナなど他の在来魚の復活のためにも、まず、外来魚の生息密度の低減が必要である。

外来魚駆除

琵琶湖における主な外来魚駆除は、1985年から滋賀県漁業協同組合連合会が主体となって国や県の補助を受けて行われている。外来魚の駆除量は15年程前には毎年400トン以上であったが、現在では100トン前後まで減少している。2005年には駆除量約400トンの内訳は琵琶湖南湖で約70%、北湖で約30%、魚種別にはブルーギルが約85%、オオクチバスが約15%であり、南湖のブルーギルが駆除量の約65%を占めていた。それに対して、2022年には琵琶湖南湖で約30%、北湖で約70%、魚種別にはブルーギルが約15%、オオクチバスが約85%であり、北湖のオオクチバスが駆除量の約60%を占めた。この間に、外来魚駆除の主体が南湖から北湖へ、ブルーギルからオオクチバスへと入れ替わっている。

このように、琵琶湖における外来魚駆除事業の対象はブルーギルからオオクチバスへ、主な駆除対象フィールドは琵琶湖南湖から北湖へと変遷している。

外来魚生息量

長年の外来魚駆除の結果、オオクチバスとブルーギルをあわせた推定生息量は2007年頃には約2,000トン前後（ブルーギルが約80%）であったものが、現在では400トン程度（ブルーギルが約50%）まで減少したと推定された。魚種別にはブルーギルが南湖・北湖とも大きく減少しているのに対して、オオクチバスは南湖では減少しているものの、北湖では近年やや増加している。

駆除漁法の変遷と今後

2005年には生息量の約80%を占めていたブルーギルが主にエリ・外来魚エリ・刺網等において捕獲されていた。オオクチバスは北湖における沖曳網が大半を占めた。しかし、現在ではブルーギルを目的とした駆除はほとんど行われておらず、オオクチバスは沖曳網・刺網・投網・エリ・エレクトリックショッカー等によって捕獲されている。

今後、特に駆除を進めるべきなのは琵琶湖北湖のオオクチバス（特に大型）であり、これに着目した駆除手法の開発研究を行って漁業者に如何にしてとってもらうかを検討する段階にあると考えられる。